フリースタイルな僧侶たち

62

なんで金なんですか？

と、編集部員の一人に訊かれて、当初は上手く答えることができなかった。「せめてお金特集なら……」と言われて、たしかに普通ならそっちだよねと、正直に思った。でも、同じ「金」でも、金。Gold である。もうすでに頭のなかでは、金のインゴットが燦然とかがやき、黄金色の小麦畑が風に波打っていた。その“物”の持つかがやきは今、紙幣なんかとは比べられやしない、可能性に満ちあふれているように思えたのである。

疫禍は抜けたが、いまだ暗雲は晴れた気がしない。いやむしろ、立ち込めているように思える。政治、経済、地球環境、倫理。このままではヤバい。そんな漠然とした危機感だけが、募ってゆく昨今だ。自動反射的に、「どうしよう？」と思い悩んでは、目的地が見当たらず、目先の距離での不時着を繰り返している。

わたしたちはどこへ向かえばいいのだろうか。できるだけ光の方へ、少しでも日向の暖かい場所へと、体を預けたい。そんな声に呼応して、「こっちだ」と、誰かが今日も大きな声で呼んでいる。でも、もう、次に私たちが向かうべき先は、誰かの指し示す光ではいけない気がするのだ。ましてや、自分自身のかがやきの照度を上げていくのでもない気がする。結果的に、誰かの指し示した光の元へ集まることになったとしても、その前にちゃんと考えたい。私にとって、かがやきとはなんなのか、と。

金を見つめたいと思う気持ちは、そのとき現れた。そのかがやきに思いを馳せながら、金の前で正座していたいと思ったのだ。

金は、不思議だ。人類の文明がはじまった当初から、貨幣や装飾品、宗教や権力とも絡みあって、実にさまざまな目的で用いられてきた。さらに、人類の金への憧れは、主に中世からルネサンス期にかけて、錬金術と呼ばれる金を生成する試みとして、科学的叡智にまで昇華されていく。人類と金との関係性を、紐解こうとすれば途方もない。

すなわち、古今東西私たちの文明は、かがやきという表象を金に託してきたといえるだろう。光、富、美、権力、貨幣、永遠、勝利、祝福、超越……それらの多元的な意味を、たった一つの物質に投影し、時には反対に、金という物質から多様な概念を見出してきたのだ。はたして、金が歴史をつくったのか、歴史が金をつくったのか、その関係はどちらとも言えて、相依的である。

つまり、かがやきは、金自体にも私にもなく、金と私の間。いうなれば、かがやきをまなざす私の心にあるのではないだろうか。

「尽十方といふは、物を逐ひて己と為し、己を逐ひて物と為すの未休なり」
『正法眼蔵』

本誌を制作している過程で、曹洞宗の開祖であり、日本禅の巨星である道元の言葉に出会った。すなわち、この世のすべては、物（対象）があって私（主体）があり、私（主体）があって物（対象）があるという、その尽きることのない働きである、と。

私が金を見たとき、その金は「私が見た金」に変わり、私は「私が見た金」をさらに見る。金のかがやきを追うことは、そのような主体と客体が相互転換し、循環していく世界を垣間見ることに他ならない。金はかがやきの鏡である。かがやきは、私と物との間で、一瞬のうちに煌めいて、永遠に生成変化しつづけているのだ。

本誌には、そんな金と対話する人たちの姿がたくさん収録されている。その目には一体どのようなかがやきが捉えられているのか。ぜひとも見届けてもらい、ひいては夜道を照らす、ささやかなハートオブゴールドを宿してもらいたいと願う。

わたしたちは、わたしたちのかがやきについて考えなければならない。ずっとそんなことを考えながら、2023年の夏を過ごしていた。ふと久しぶりに高校時代の卒業アルバムを開くと、出席番号2番の私の欄には、名前と顔写真のほかに「きらめき120%」という言葉が綴られていた。ほかのクラスメイトの欄には、「夢は叶う」や「友情」といった、門出にちなんだ言葉が並ぶ。なぜ私はあのとき、そのような間抜けな言葉を選んでしまったのだろうか。ましてや、なぜ限界を超えてかがやこうとしていたのだろうか。

さっぱり忘れてしまった。でもおそらくわたしたちは、無常の隙間で願ったそのかがやきに用があるのだ。

文＝稲田ズイキ
フリースタイルな僧侶たち 編集長

Photo by K.Norimasa

GOLD interview

金の道をゆく人たち

金はいつも、少し遠くで光っている。それを憧れと名づけるべきか、畏怖というべきか。
少なくともその距離は、かがやきの一片となっている。
僧侶、ジュエリーデザイナー、箔押師。見て、触れて、呼吸して、
金のかがやきを探求する3名を訊ねた。

01

平等院 住職

神居文彰

Monsho Kamii

千年続く金色百景

Photo by Monsho

「宝像の閻浮檀金の色の如く」。仏教の経典『観無量寿経』にはそう書かれています。平等院の阿弥陀如来坐像の金色は、そこから由来しています。もちろん金は金ですが、大事なのはその金色がどうあるかですね。

平安末から鎌倉にかけて、工芸では、青の金が主流だったのですが、阿弥陀仏さまに関しては一貫して赤色の金が使われていました。さらに、調査の結果、場所と役割によって金箔の種類が使い分けられていたことがわかりました。例えば、鳳凰堂では阿弥陀如来には純金、釈迦如来には銀や銅を合わせた金が使われていたようです。純金は扱いが難しいものですが、当時の基準の10倍ほど厚く捺されていました。なぜここまで明らかに差を設けて、金を繊細に表現してきたのか。それはやはり仏であるからです。僕らの先輩は古くから、色の細やかな違いや、ものの意味、そして仏さまであるということを大切にされてきたのだと、つくづく感じています。

平等院 阿弥陀如来坐像

今の文化財の主流である「変えない」という修理の方式は、実は明治時代に確立された新しい手法です。平等院の荘厳を隅々まで分析してみると、重層する修理の歴史が明らかになります。例えば、修理をする際に金箔を潤沢に使えなかった場合、下に弁柄を施して赤っぽく見せるなど、当時の状況に鑑みて技術を結集させ、金色は表現されてきたんですね。

また最近の材質調査で判明したのは、鉄の表面加飾に金を用いていた事実です。これまで鉄には鍍金ができないとされてきたため、これはロストテクノロジーであり、常識を覆す新事実でした。また、その表面はテカテカではなく、むしろ金泥に近いような色だということも想定されています。その淡い光のなかに人は何を感じたのでしょうね。

阿弥陀仏は無量光如来といわれ、無限の光です。技術を紐解くと、当時から求められていた光とはおそらく、夕日や朝日などの自然光の中で移ろいつつ、淡く変化する光の色。1000年前に見た金と、変わることなく同じに見えるなんて、こんなにすばらしいことはありません。その光のなかに包まれたいと思える光色を再現できればと願っています。

鍍金の痕跡が見つかった鳳凰堂の鉄金具

鉄の表面装飾に使用されていた金

神居文彰 Monsho Kamii

1962年愛知県生まれ。1991年大正大学大学院博士課程満期退学。1992年平等院住職に就任。現在(財)美術院監事、(学)埼玉工業大学理事、東京藝大非常勤講師、メンタルケア協会講師など。主な著書に「臨終行儀－日本的ターミナルケアの原点－」(北辰堂)、「平等院物語」(四季社)、「平等院鳳凰堂 よみがえる平安の色彩美」(東方出版)、「よみがえりゆく平等院 新資料で再現する平安美」(学研ビジュアル文庫)ほか。

02

ジュエリーアーティスト

横内さゆみ

Sayumi Yokouchi

金の声を形にする

『star』空洞状の球体のジュエリー。純金ゆえに柔らかく、表面に凹みや傷が刻まれていき、身につけた人の時の経過を宿す。

幼い頃からジュエリーは、キラキラしている憧れの存在でした。アメリカの美大に進み、彫金を専攻してさまざまな視覚芸術を学んだ際に、コンテンポラリージュエリーの存在を知りました。コンテンポラリージュエリーは、貴金属や天然石に限らず、自由な素材とアプローチでつくられる、多様性のあるジュエリーです。自分が表現するものを身につけて歩けることに魅力を感じ、大学院で金属に関わる加工技術を一から学びました。

私の作品は「糸と線」の動きから得る、繰り返しの形が多いことが特徴です。同じ作業の先にある、明確に見えない形への好奇心と反復の中で生まれた偶然の形や、曖昧な境界に美しさを感じます。繰り返しからできるパターンや形の配置に違和感を感じながら、同時に安堵も感じられるようなジュエリーが理想です。

作品をつくるときは、自分が扱うと決めた素材の声を見出すところから始まります。同じ金属でも金、銀、銅など、それぞれが全く異なる性質を持っていますし、試作してみないことには知れない一面もありますね。そうして素材と向き合っていくと、メタファーのような感じで素材が応えてくれるんです。素材の言葉にならない声を受け取って、視覚的に翻訳するのが、私の作品づくりのプロセスになります。

『Coil』制作風景。純金の板を金切りばさみで裁断する。

『Coil』金のワイヤーをコイル状に巻きつけたイヤリング。線が細くても硬度を保てるのは金ならでは。

金にはさまざまな意味があるから、身につけるだけで豊かな気持ちになれますよね。永遠や太陽など、シンボルとして金は古代から象徴性が強い存在ですが、その魅力を生んでいるのは、金そのものではなくて、金が作り出す光と影なのではないかと思います。人々は暗闇のなかで光りかがやく情景に金の魅力やパワーを感じたのではないでしょうか。

金属って一度形を作っても、また溶かしたら新しい形にできるんです。「自分の使用する金の一部は、もしかすると何千年も前に使われていたのかもしれないなぁ」なんて思いを巡らせながら、作品を身につけられる体験は、ジュエリーならではかもしれないですね。

横内さゆみ Sayumi Yokouchi

東京出身。「素材の中に声を見出す」をテーマに、独自の世界観とアプローチで国内外で幅広く作品を発表。つくるをさまざまな発想からつなぐデザインやスタイルのカスタムオーダーとリメイクを中心としたサステナブルスタイルジュエリーのアトリエを東京に設け、現在は武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科金工にて非常勤講師を務める。

www.sayumiyokouchi.com

@sayumi_yokouchi, @atelier_ess

03

箔押師

藤澤典史

Norihumi Fujisawa

1万分の1mmの呼吸

金箔押体験のワークショップをしていると、「なんで金箔を貼るんですか?」とよく訊かれるんですが、金は神さま仏さまの導く光だと説明することが多いですね。お寺のお堂に照明がなかった時代は、天井に吊るした天蓋や仏像の金箔でろうそくの光を反射させて、明かりを取り入れていたとも言われています。空間に金があるかないかで、見え方が全然ちがうんですよ。金は宗教上の表現であり、技術でもあったということですね。

箔押師は、金箔を綺麗に貼る仕事です。1万分の1㎜ほどの薄さの金箔を、いかにツルーっとシワなくムラなく綺麗に押せるか、そのほとんどが金箔を接着する下地となる生漆のタイミングにかかっています。生漆は、はじめは水っぽいのですが、時間が経つとガムテープみたいに粘りが出てきます。箔押師はものの素材や気温、湿度なども考慮しながら、目には見えないそのタイミングを五本の指の感覚だけで確かめるんです。早まってもだめだし、待ちすぎてもだめ。漆が乾いていないと、稲光といって金箔が急に吸い付くこともあります。生漆のタイミングで金の光り方はびっくりするほど変わるんです。それが漆を拭くという技術ですね。

小さな阿弥陀さま。金箔に傷がつかないよう繊細に。

押し終えた金箔を真綿で払う。

職人を目指したきっかけは特になくて、いつか祇園祭に携わりたいなぁと思っていただけなんです。生まれたのが新興住宅地だったので、ずっと地元のお祭りに憧れがありました。祭りはやっぱり、カッチョいいじゃないですか? 今でも祭りの山車とか、仏壇や欄間などの伝統工芸の造形を見ると、鳥肌が立つことがありますね。

たまに「金はやらしい」なんて言われることもあります。でも合計2000人くらいにワークショップをした経験から言うと、金を前にして目をキラキラさせない人は一人もいませんよ。紀元前3000年のエジプト時代から、宗教の表現として装飾品として、人はずっと金に憧れてきたんですから。だから僕はね、金が好きなのは人間にとって当たり前なことだと思うんです。箔押師として自分ができることを、オブジェやアートへ応用しながら、職人の口から「金はカッチョいい」ということを伝えていかなあかんなと思っています。

天上の花として知られる彼岸花を木彫で仕上げ、漆、金箔を押した作品。

藤澤典史 Norihumi Fujisawa

1975年京都市生まれ。1994年京都伝統工芸専門校(現:京都伝統工芸大学校)に入学。京仏具金箔、蒔絵、彩色コース専攻。1996年卒業後に伝統工芸士で金箔押師、岡本正治に師事。全国の寺社仏閣の金箔押に携わる。2015年独立(京金箔 常若 設立)。

@kyokinpakutokowaka

2023年4月29日
イングランドプレミアリーグ 第34節
ブライトン・アンド・ホーヴ・アルビオン（ブライトン）
vs. ウルヴァーハンプトン・ワンダラーズ（ウルブス）

文＝福井裕孝

ブライトンには三笘薫がいるが、ウルブスにはアダマ・トラオレがいる。アダマ・トラオレは、スペイン代表のウインガーで、かのFCバルセロナの下部組織出身の選手。筋肉がムキムキでラガーマンのような肉体をしている。あと足がめちゃくちゃ速い。右サイドを主戦場とし、圧倒的なフィジカルの優位性をもって一人で局面を打開し決定機を作り出す。彼の不器用ながらもひたむきで真っ直ぐなプレースタイルが大好きで、しかも誕生日が8日違いの同い年ということにも何かの縁を感じる、自分にとって特別な選手の一人だった。対するブライトンの不器用ながらもひたむきで真っ直ぐな左サイドバック、ペルビス・エストゥピニャンとのマッチアップを楽しみにしていたが、ここしばらくトラオレの出場機会は減少しているようで、この日も彼はベンチスタートだった。

試合は前半が終了して4-0。ターンオーバーのため三笘をはじめ主力選手らをベンチに置き、控え選手中心で臨んだホームのブライトンがウルブスを圧倒しており、もうほぼ決着はついていた。今日はこのまま三笘も温存するだろうし、日本から夜更かしをして見ている私としては、あとはトラオレの投入に期待したが、後半が始まってもなお、彼はまだピッチに現れなかった。

後半さらに追加点を奪ったブライトンは、後半11分に三笘を投入。しかしトラオレはまだ呼ばれない。これだけ大差がついてどうにもならなくなったらトラオレの一人や二人投入したくなりそうなものだが、ウルブスの名将ロペテギは動かない。

待ちに待った後半38分、ついに金色のユニフォーム背番号「37」がカメラに映し出された。

彼はピッチ上の誰よりもかがやいていた。後半46分、ルーズな浮き球をトラオレとエストゥピニャンが競り合う。心待ちにしていた肉弾戦。正当なチャージに見えたが、エストゥピニャンのあまりに派手な吹き飛びっぷりからファールと判定され、主審から警告をもらったトラオレ。しかし画面に表示されたイエローカードは、私の目にはかがやいて見えた。そのかがやきに偽りはない。試合はウルブスが6-0で負けた。

私の金（わたしのきん）

C:20 M:30 Y:90 K:0

☑ あなたにとっての「金色」は？（CMYK カラーコードで指定してください）

☑「金色」で思いつくものやことは何ですか？

中川友香
俳優

C:0 M:22.3 Y:100 K:5.1

金柑と金具

3月の終わりに金柑を買って食べた。金柑そのものをみても金色だとは思えないから、実に日光が当たって光り輝くように見えたのではないかと想像する。黄金色に熟すから、と聞くと黄色の占める割合が気になる。薄く果肉のついた種は金色にみえた。また「金具」と聞いて思い浮かぶ色は黒や銀であると気付いた。

中川友香｜活動拠点は関東で、ここ数年の冬は演劇の上演で京都にいることが多い。

鳴門煉煉
物書き

C:0 M:9 Y:80 K:0

秋

夏が終わって、厳しい冬が来るのを憂うだけの時間のことを「秋」だと思っていたのですが、跨線橋を歩いている自分の手の上に純金を置いた時に物質としてはっきりとした重さが手元に残り、感覚として安定という意味を理解できました。自分と異なる時間軸で存在している物事がある！と勇気づけられます。たまに光に照らすと、広大な土地に秋の稲穂が生い茂っている原風景が見える気がします。

石橋和也｜会社員をしながら友だちの音楽作りを手伝っています。 @_ethno

カジハラリオ
学生

C:0 M:11.6 Y:76.6 K:4.9

金髪

高校時代は校則が厳しく、黒髪を強いられていて、田舎だからか、街で派手な服装をするだけでも好奇な目で見られることもあり、金髪に強い憧れがありました。高貴で美しく、陽の光を受けて艶やかに輝く金髪は、私にとって自由そのものでした。卒業後、初めて髪を金に染めたときの清々しい気持ちが忘れられないです。

カジハラリオ｜モラトリアム継続中の22歳。イギリス修士留学のため英語の習得に勤しむ日々。シンメトリーフェチ。

宮本ふみ
美術館職員

C:0 M:16 Y:84 K:66

お金（紙幣や貨幣）

金色はお金を想起させる色だから、「日常的な色」というイメージが強い。手垢がベタベタついた10円玉とか、ヨレヨレの千円札とかを連想させる色。別にお金に執着しているわけでもなく、かといって倹約家でもないけど、ただただ生活してるだけでもお金は日常と切り離せないものだから。実際「もう少し給料が高ければ…」と思うこともあるけど、生活する土地や環境を変えればお金に対する感覚も変わるのかなとも思う。

宮本ふみ｜青森県にある田舎の村出身。2020年より弘前れんが倉庫美術館にて勤務。

石橋和也/ethno
会社員

C:0 M:3.8 Y:45.5 K:27.9

安定、時間の長さ、普遍性

たせたい時に使うし、キラキラする金は、上品な高級感を出したい時に使います。CMYKの色表現にプラスすると、ちょっとワンランク上のデザインに仕上がります。

太田絵里子｜フリーランスデザイナー。ロゴマーク、ポスター、グッズなど幅広いデザインを手掛ける。過去に名刺や冊子のデザインで「金」を取り入れたことがある。

小田切孝太郎
ライター

C:0 M:7 Y:60 K:0

苦手な色＆結婚式

威圧感の象徴みたいな感じがして苦手。元プロ野球選手の清原とか、高校の同級生が「悪くてかっこいいだろ？」的な感じで身につけてるのが好きではなく、個人的に避けてきた色。大人になってからは許容する心が芽生え、フォーマルな装いには欠かせないものになっている。ネクタイピンやカフスボタンに取り入れています。

小田切孝太郎｜青森で桃を育てている編集者。独立する（農家として）のが今の夢。

Gameboy
農家

C:1 M:24.4 Y:91.2 K:0

スピリチュアルな色、仏

金色は、距離で印象が変わる。想像の中では神々しいエネルギーに満ち溢れているが、服やアクセサリーに取り入れた途端、その尊さは失われいく。遠ければ遠いほど輝きを放つ色だと思う。

Gameboy｜ふだんは米を作りながら音楽も作っている。@gameboy_official

合わない色、似合わない生き方だったのだと思う。今は白髪交じりの黒髪で腕時計はしていない。

Numari｜青森で写真を撮ったり、ZINEを作ったりしています。

佐藤すきま
働きながら絵を描く人

C:0 M:24 Y:53 K:16

漢委奴国王印

「金」と聞いて、まず頭に浮かぶのは「かんのわのなのこくおういん」。漢字にして「漢委奴国王印」。韻を踏むリズム感（なのなのなすびのかきのたね感）が良くて今も時々口ずさむ。去年、古道具屋で持ち手が子ライオンになっている漢委奴国王印風ペーパーウェイトを見つけて漢委奴国王印のことを久しぶりに思い出した。かんのわのなのこくおういん。

佐藤すきま｜人間型感情記録装置。カセットやCDに顔を描く人。口癖は「早く個展を開きたい」。

太田絵里子
デザイナー

C:0 M:18 Y:52 K:27

神聖な物のイメージ

デザインに取り入れると特別感がある。高級なイメージを出したい際には金の箔加工をつかったりする。金の白加工には赤金、青金、艶あり、なしなどがあるが、青金は高級感の他上品さを出したい時に使う。艶なしにすると、さらに上品なイメージに仕上がるかなと。赤金の箔は、ゴージャスさを出したい時に使う。同じ様に艶ありにするとさらに高価なイメージ派手さを表現できる。反対に艶を抑えると少し上品になる。デラデラする金は、目立と香ってくるキンモクセイや、西日の透き通る銀杏（金じゃない！）の葉や、風が吹くといっせいに揺れる稲穂など、その景色のひとつひとつが引き出しのようで、そこにしまわれている感情があることを忘れていた、ということを「金色」の季節になると思い出します。

鳴門煉煉｜生きてるだけで、ワーイ。日記を書いたり、古本市を企んだりしています。Twitter @ikiteruyeah

時の音 マスター
コーヒー屋のマスター

C:0 M:23 Y:97 K:4

最も位の高い様、お金、人間の業

お金で連想すると、それを求める人間、それを取り巻く人間社会、それによって不幸になる人を考えると、お金って人間の業そのものだし、それを引き出すやばいものだなって思う。裏を返すと、お金に振り回されない人格を創ることができれば、理想だなって思う。ただ、それは人間じゃないかもだけど（苦笑）。

時の音マスター｜暇さえあれば『幸せ』について考えるコーヒー屋のおじさん。

Numari
写真家

C:0 M:17 Y:94 K:6

金メッキ

一番調子に乗っていた時、私は金髪で金の腕時計をしていた。本人はいい気分だったがどこか奇妙だったと思う。その後、人生は急転回し生まれ育った青森へ逆戻り。メッキが剥がれた私の人生は青森からやり直しとなった。似

過去〜現代〜未来へ、かがやきを継承する。

クローン文化財

Clone Cultural Properties

取材・文＝稲田ズイキ　取材協力＝IKI株式会社

© 東京藝術大学 COI 拠点

初めて目の当たりにしたとき、思わず目を疑った。

日本最古の木造建築であり、日本初の世界遺産である法隆寺。その金堂に安置され、門外不出であるはずの国宝「釈迦三尊像」が目の前に鎮座していたのだ。「クローン文化財」と名づけられたそれは、現状の三尊像のあるがままの姿が、質感まで高繊細かつ忠実に再現された複製物なのである。

クローン文化財は、現代のデジタル撮影技術や、2D・3D技術を融合させて、高繊細な複製がほどこされている点で、これまでのレプリカとは大きく異なる。実物の詳細な調査を重ね、人の手技や感性を取り入れることで、文化的背景、精神性など、いわば「芸術のDNA」にいたるまでを再現しようとする試みだ。文化財にはつきものの、ガラスケース越しの鑑賞からも解放され、間近でしかも直接手で触れて親しむことさえできる。

しかし、衝撃はそれだけにとどまらなかった。その隣には、金色にかがやく釈迦三尊像が、そのまた隣には、透明の釈迦三尊像が鎮座していたのだ。金色のそれは、劣化や欠損への補完を含め、可能な限り過去の状況を分析し、当時の金の装飾までもを復元した、釈迦三尊像の当初の姿である。スケルトンの釈迦三尊像は、制作時に表現したかったと想定される本質を、当時の技術や材料などの制限から解放し、現代科学技術のもとで創造する、まったく新しい作品として生まれ変わっていたのだ。

現在の文化財の再現を「クローン文化財」と呼ぶのに対し、劣化もしくは消失した文化財の過去の姿の復元（金色の釈迦三尊像）は「スーパークローン文化財」、文化財の未来の姿を創造したもの（透明の釈迦三尊像）は「ハイパー文化財」と名づけられた。

それらが従来の複製とは一線を画しているのは明らかだ。三組のクローン釈迦三尊像は、あるがままの姿を再現するだけではなく、当時のかがやきを蘇らせ、そのかがやきを別の形へと昇華させたといえる。私たちが金に見るあの荘厳が、いま異なるかがやきとなって現れたのだ。

お話を聞いた人

宮廻正明（みやさこ まさあき）
日本画家。クローン文化財研究開発リーダー。東京藝術大学名誉教授。IKI 代表取締役。

三橋一弘（みはし かずひろ）
クローン文化財戦略企画担当。IKI 取締役。

レプリカを超えて、「物」から「心」へ。

クローン文化財の研究開発は、東京藝術大学のプロジェクト「センター・オブ・イノベーション（COI）拠点」によってはじまり、同大発ベンチャーの株式会社IKIが活用事業の展開を担う形で進められた。2023年3月でCOI拠点の元を離れ、現在はIKIがすべての舵取りを行っている。

これまで開発されてきたクローン文化財は、壁画や絵画、彫刻など多岐に渡る。2016年にはバーミヤンの壁画《天翔る太陽神》の復元に成功し、G7伊勢志摩サミットで展示公開するなど、これまでの実績をあげれば枚挙にいとまがない。

バーミヤン東大仏天井壁画《天翔る太陽神》復元
© 東京藝術大学 COI 拠点

クローン文化財の意義は、文化財の持つ「保存と公開」という矛盾の克服にある。保存だけを尊重するなら秘仏のようにそれ自体の価値を封印することになり、一方、公開を優先すると劣化や損傷のリスクを負う。そうした矛盾を乗り越えるために、一種のタブーであった、いわば「贋作」の発想を進化させたのが、クローン文化財である。

国宝釈迦三尊像をクローンとして再現するプロジェクトは、2014年に法隆寺・文化庁・東京藝術大学COI拠点の三者の合意から始まった。まずは金堂内に高繊細3Dスキャナーを持ち込み、三尊像の現状の姿を計測し、藝大で専用に開発されたコンピュータで解析し、3Dモデリングを行った。3Dプリンターで出力された原型をもとに、ほとんどの部位は富山県高岡市の鋳物職人の手により、当時から存在する「ロウ鋳造法」で鋳造される。ここで表面の質感をより近づけるために、工芸科出身の研究員が形状に合わせたヤスリやキサゲなどを特注し、芸術家の手作業によって修正が加えられた。さらに、経年変化したブロンズの色を再現するため、緑青仕上げといわれる銅合金が長い年月を経て生じる天然緑青色を短期間で発生させる技術を用い、最後に絵画の専門家が全体を手彩色で補うことで、クローン文化財が完成した。

釈迦三尊像のクローン文化財「現在」
© 東京藝術大学 COI 拠点

© 東京藝術大学 COI 拠点

鋳物の修正、仕上げ

3Dスキャナーによる計測

手彩色による仕上げ

ロウ型鋳造

こうした芸術と科学が一体となって、文化財の「現在」を追うその眼差しは、おのずと「過去」にまで向けられるようになる。創建当初は飛鳥時代、今からおよそ1400年前の姿を蘇らせるため、まずは経年により失われた螺髪（らほつ）・白毫（びゃくごう）・飛天の復元からはじまった。残存する文献や、研究者との連携、同時代の他の文化財との比較から、かつてあった姿を想定し、3Dモデルや手作業による造

形で復元していく。当時の釈迦三尊像の金色は、水銀と金の合金（アマルガム）によって鍍金されていたと考えられている。金を大量の水銀に溶かして、鋳造した像の上に塗布し、火で炙って水銀を蒸発させ、金メッキとする方法であるが、この方法は環境や人体への害があまりにも大きく、ここからも当時の人々が仏の金色に対して並々ならぬ思いを抱いていたことがわかる。今回の復元では、電流を用いたメッキ法と金箔を貼る方法の二種類が検証され、後者が採用された。こうして、スーパークローン文化財が誕生し、当初の釈迦三尊像のかがやきを復元するに至った。

クローン文化財研究開発リーダーの宮廻正明氏は、こう語る。「物としての文化財は、自然に劣化もしますし、破壊されることもあります。しかし、人間の叡智はそれを復元することができる。物としての文化財がたとえなくなっても、クローン文化財によって、その心を保存し、文化に対する魂を継承していくことができるのです。」

釈迦三尊像のスーパークローン文化財「過去」

© 東京藝術大学 COI 拠点

スーパークローン文化財の制作工程

© 東京藝術大学 COI 拠点

1 螺髪・白毫の復元

現在残る螺髪から三種類の螺髪を3Dプリンターで出力し、銅合金で鋳造したものを頭部に一つずつ取り付けた。

2 大光背飛天の復元

飛天の形状は、比較的特徴の似通っている光背を基本資料にして制作。素材には、像と同じ銅の鋳物を採用した。

3 鍍金の復元

金箔（1号箔）を貼ることで、オリジナルのマットで上品な質感を再現した。

4 箔押

専門の職人の手によって箔押しを行った。

5 彩色

文献をもとに螺髪を群青で彩色。また中尊にかすかに残る目や髭は、墨と辰砂を用いて描き入れた。

金は色ではなく、光である。

クローン文化財は単なる複製物の域を超えて、文化財保護という名の下に行われる、過剰な「物」の尊重に疑問を投げかける。クローン文化財戦略企画担当の三橋一弘氏は「本来、文化財は大事な教えや美しい心を誰かに伝えるなど、文化を継承するためにつくられてきました。でも、今はただ守ることだけが目的になっている」と語る。後世に残すべきは、文化財そのものだけではなく、それを見て触れて覚える感動や、それを再現するなかで生まれる新たな創造性も含まれるはず。クローン文化財は、独占から共有へ、文化財保護から文化継承学へと、これまでの文化財にまつわる歪みを是正していく営みでもある。それゆえ、商標・特許などの厳しい管理体制を確立し、マーケットへの影響も鑑みながら慎重に運用されている。

また、宮廻氏は、日本の文化の特質として、「うつし」を挙げた。かつて西の文化が東の文化と混在を繰り返しながら、シルクロードを渡り、日本へと伝えられたが、日本はその文化を受容し、模倣し、変容し、そして超越して独自の文化を生み出してきた。「模倣と超越が、日本の文化の根源である」と。

そうした「物」ではなく「心」を継承する姿勢を体現するのが、ハイパー文化財、すなわち透明の釈迦三尊像である。仏像は本来光によって、人々を仏教の精神へと導くものではないかという仮説のもと、仏像を金という光の象徴から光そのものの姿へと新たに描き変え、釈迦三尊像の「未来」を実現するプロジェクトである。宮廻氏は「私は、宗教とは元々は人間がどうあるべきか、といった思考であったのではないかと考えています。しかし、今はその原点から離れてしまい、物質だけが残っているように見えてきます。形あるものは限りがあるので、いつか争いを生んでしまうのではないでしょうか。」と語る。

釈迦三尊像のハイパー文化財「未来」　© 東京藝術大学 COI 拠点

こうした金から光への昇華は、日本画家でもある宮廻氏の色に対する深い造詣から導かれている。宮廻氏は金を単なる色ではなく、構造色として捉える。構造色とは固有の色をもたず、光の反射によって色を有しているように見える色のことであり、法隆寺の有名な玉虫厨子（たまむしのずし）の玉虫色もしかり、生死の輪廻を超えた永遠の表現として用いられるのだそうだ。つまり、金の実体はそれ自体の色ではなく、永遠の光なのだという。

未来へ、私たちのかがやきを解放する。

再現と復元のプロセスで創建の精神性を追体験するなか、宮廻氏の頭のなかには一つの仮説が生まれていた。仏教とは本来、自然科学も含めた宇宙観の表れであり、古の人々は仏像で光と宇宙を表現したかったのではないか。さらに、イメージを具体化するなかで、透明素材でつくられた仏像の内側から光があふれだし、頭上の天蓋（てんがい）に宇宙や星雲のような模様が映し出されている光景を思い描いた。そうして造形されたガラスとアクリルからなる釈迦三尊像は、光線が螺髪全体を通ることで、天蓋に曼荼羅を思わせるような右巻きの光の螺旋模様を映し出すことに成功し、オリジナルを超越する一つの未来の形を提示することができたのである。

光の検証　© 東京藝術大学 COI 拠点

私たちは古代より文化・芸術・宗教が織りなす文化財のかがやきに触れ、憧憬を抱くことで、私たち自身のかがやきについて思いを馳せてきたとも言えるだろう。最後に、クローン文化財の可能性について宮廻氏はこのように語った。

「私たちはいつのまにか損得で物事を判断するようになりました。目には見えない祈りや感謝を社会に還元していかないと、世の中は疲弊の一途を辿っています。いつか地球の資源は尽きますが、文化資源はつくりだすことができるのです。これまで独占され、投資の目的として購入されていた文化財が、クローン文化財により解放され共有できる時代が来て、心の癒しや祈りの気持ちが少しでも社会に満ちあふれることを願っています。」

かつて金色にかがやいていた釈迦三尊像。時間の経過で失われたその金色を、私たちは想像し、心で補うことによってかがやかせている。過去・現在・未来の時を超えてつくられたクローン文化財は、そんな私たちの金色をまなざす心を具現化し、一つに形どられていた心を無限に解放した。

今、金は私たちの目に、どのようなかがやきを映しているだろうか。

Jane1905

Guama Uchida

14金の指輪をはめた。これは私のものではなく、知人から一時的に借りたものだ。シグネットリングと呼ばれるそれは、イギリスの昔の貴族が大事な書面を交わす際、蝋を押し込むときに使っていた、いわゆる印鑑のようなものらしい。だから平たい面に刻まれている溝はだれかの名前であって、裏側をみると“Jane1905”と彫ってある。きっとジェーンという名の貴族が使っていたのだろう。でもほんとうは代々受け継ぐものだから、こんなふうに私の手元に渡ってくるのは、貴族のなかでもあまり偉くない人のものだという。本来は小指につけるみたいだけれど、男性用だから私の小指にはぶかぶかで、かといって人差し指には入らない。すべての指を試してみたが、左手の薬指にしかうまくはまらず、仕方なくそこが定位置にきまった。私はこの指輪を、そのまま“ジェーンイチキューマルゴ”と呼ぶことにした。

Jane1905はつけたばかりのときはひやり冷たいが、すぐに体温に馴染んだあとは、重たさだけが指の根本にちいさく残る。普段は大人しくしているけれど、光を受けると強気に跳ね返し、側面に掘られた百合のような花と馬のひずめ模様が組み合わさった装飾を、きらり見せつける。

約1ヶ月間、私はJane1905と日々を過ごした。どこへ行くのも一緒だった。都内はもちろん、旅行先も、家のなかでも。あらゆる場所で、私の薬指にはその黄金の輝きがあった。外から帰ってくると手を洗うついでに、泡ですべらせてJane1905を外した。すべりがないまま外そうとすると関節のあたりがきつくしめられ、回したり力任せに引っ張ったりして無理やり取らなきゃならないからだ。泡があればそこまではしなくて済むが、それでもすこしだけ痛みが残るから、外すたびに「私の指がこれ以上ふとくなったら、Jane1905を身につけることはできなくなる」と思う。ある意味、私の指のふとさは、Jane1905に決められている。もしもJane1905を身につけているとき、私の指がむくむくとふくらんでいったなら、鬱血して死ぬのは私の指の方だ。Jane1905は死なない。そんなことは起きないとしても、指がむくんでいる日は当然すこしきつく感じる。そんなとき、金というものの不変性を感じるとともに、私の肉体の流動性をも目の当たりにする。そうしてだんだんと、私がJane1905を身につけているのではなく、Jane1905のなかに私自身を押し込んでいるのだ、という気分になってくる。

思えば、1905年のイギリスにいたかつての持ち主がけっして見ることのできない風景のなかに、Jane1905はいるのだった。主人を失ったJane1905の長い年月を思うと、どうにも切なくなるけれど、時が経てば経つほどその輝きの尊さは増すのだろう。私が生きてきたほんの20数年のあいだにも、街の風景は絶え間なく移ろい変わって、懐かしさは次々と滅びていった。ひとも時が経てば老いて醜くなって、そのうちこの世のどこにもいなくなるけれど、Jane1905は時の流れに振り回されることなく、永久不滅の輝きを放ち続ける。今この瞬間、私をうっとりとさせるJane1905の輝きは、きっと100年以上前のそれと変わらない。これからまた100年経って、私がどこにもいなくなっても、Jane1905はどこかの街のだれかの手元で、変わらずきらめいているのだろう。

内田紅甘
女優／エッセイスト

1999年生まれ。2007年に子役デビューし、現在は女優業の傍ら執筆業も行う。主な出演作に『白河夜船』（2015年）『光』（2017年）など。ANAの機内誌『翼の王国』にて、6人の作家による連載「ライト、フライト」に参加中。

金閣寺

荘子it

本稿を執筆するにあたって久しぶりに金閣寺へ行ってきた。修学旅行の中高生達に加え、コロナの緩和、円安などもあってインバウンドが増加した影響か、非常に多くの外国人観光客が訪れ賑わっていた。

生後3ヶ月の我が子を抱えながら、金閣寺の美しい眺望と庭園の散歩を堪能できた。しかし、これは偏見かもしれないが、金閣寺は見かけの派手さ故に真剣に語られることが少ないように感じる。〝銀閣寺の方が好き〟といった方がなんとなく趣味がいいように感じられる空気を、金閣寺が大好きな僕は常々感じてきた。本稿では、僕自身の最近の経験を交えながら、金閣寺について最大限掘り下げて考えてみたい。

僕は最近結婚して、〝庄子（ショウジ）〟（日本語では荘子と書くが、中国語では庄子と書く）から、妻と同じ〝金城（キンジョウ）〟に変えた。〝キン〟と〝ジョー〟という、kとjの響きの連なりがたまらなく好きで、妻と出会う前から、Dos Monos のとある曲のタイトルを〝KIN JOE〟にしようとしていた程だ。結局、その曲はメンバーとの協議の結果〝王墓〟というタイトルになったが、程なくして自分自身のタイトルにできたのだから思い残すことはない。

わざわざ芸名にした〝荘子（＝庄子）〟へのこだわりはどうしたと思われそうだが、荘子の思想に倣えば、名なんて捨ててありのままに任せればよいのだから、結婚を機に変えてしまうような軽やかさこそがむしろ荘子らしいということになりそうだが、実はそれほど単純ではない。

この姓の変更は、決して軽やかとはいえない身振りの果てに獲得したものだ。庄子家の父からは姓を変えることに〝反発〟（夫婦の意志に明確に〝反対〟することに道義的な抵抗を覚える常識を持つ父の心理的なそれ）があった。父は納得のいく説明たるものを求めたが、僕は綺麗に話し合いを終えることもなく籍を入れた。

僕は自分が金城姓になることは「なりたいというより、なることが必然である運命」だと、決心ならぬ確信を持っていたが、こうしたクオリアは他者と共有できるものではないから、貫こうとすればトラブルが生じる。関係性の中で生きる人間である以上は当然の事態だ。

荘子の「無為自然」、あるいは浄土教の「他力本願」のように、ありのままであることを良しとする思想に反して、僕の振る舞いはかなり意固地で積極的なものだったと言えるだろう。そもそも、金城という名前に変わることを運命だと感じるより以前に、〝KIN JOE〟という響きへのフェティッシュなこだわりや執着が一切なかったとどうして言えようか。運命というロマンチックな感覚は自己正当化の心理の産物ではないか。

だが、こうした自己批判の先で、何もしないということを選ぶとしたらどうなるか。庄子姓であり続けるために妻に姓を変えてもらうのでは、トロッコ問題で進路を変えずに5人を轢き殺すようなものでなんの解決にもならないが、夫婦別姓が認められるのを待ったり、そもそも入籍しないでいるということも十分にあり得るだろう。

しかし、僕はやはり変わることを選択し、しかも、これをトロッコ問題ではなく、モンティ・ホール問題のアナロジーで理解した3つの姓のうち、僕は庄子姓を選んだ状態でスタートラインに立っていて、

1つの姓（母親の旧姓）が消滅し、残り2つの中で、金城姓に変える権利があったということだ。多くの人は変えることに意味はないと思うが、その予想に反して、僕は倍の可能性を手にした。正しく運命を実現せしめるためには、変える／変わることが必要なのだ。「そのままの君」（Just the way you are）ではなく「ありのままの自分」（Let it go）でいるためには、意志と力が必要なのだ。「無為自然」ではなく、「有為自然」である。

金閣寺は、正式には臨済宗相国寺派の寺院・鹿苑寺のことだが、禅宗である臨済宗は「自力本願」だから、自ら運命を切り開くことに積極的な思想を背景としている。その意味で僕と思想的な親和性もある。だが、皮肉なことに、金閣寺が絶対権力者足利義満の権威を示すものであるのに対し、荘子が南華老仙となって張角に太平要術の書を託したことで黄巾の乱が起こり戦乱の世の火種となったように、受動と能動、保守と革新、安定と変革の二項対立が逆転することもある。グローバルなネオリベが既存の社会システムを温存し、愛国者が革命や戦争やテロを起こすように。

さらに、金城となった僕と金閣寺の共通点は「金」だけではない。「嫉妬（シット）」もそうだ。三島由紀夫の小説『金閣寺』は美への嫉妬を主題としている。嫉妬は、俗世間的な感情の最たるものだと思う。純粋な飢餓感ではなく、自他の比較を通して生まれるものだからだ。嫉妬をする状態というのは、ある意味、自他の境界に執着しない悟りの境地と最も遠いのではないだろうか。荘子 it という名に嫉妬を忍ばせたのは偶然ではない。悟り切ることも、畜生のように「ソーシット（＝めっちゃクソ）」であることもまた、音楽の上では同等に肯定したいからだ。

荘子の読みが「そうし」と「そうじ」の清濁どちらの場合もあるように、「いろは歌」の「あさきゆめみし ゑひもせす」の「あさきゆめみし」も、〝浅き夢見し〟と〝浅き夢見じ〟の両方の解釈が成り立つ。「見し」なら単に「見た」、ということになるが、「見じ」だと「見ないぞ」になる。浅き夢とは即ちこの浮世のことだが、僕には「見じ」より「見し」の解釈の方がしっくりくる。もうこんな悲しい浮世とはオサラバだという「見じ」より、「見し」の方が、様々な感慨を一緒くたに噛みしめ、清濁併せ呑みながら、これをまた繰り返していくのだという、反悟り的な覚悟の境地を感じさせるからだ。考え方にもよるが、僕はこうした世俗を捨てないあり方をより深い（決して崇高ではないがある種の霊性を帯びた）ものだと感じる。

嫉妬で焼かれた後に、さらに金箔の量マシマシで建て直され、今でも圧倒的な観光名所であり続けている金閣寺には、外見の美しさ以上に、一筋縄では行かない世俗の矛盾を生き抜く図太さが宿っている。そんな金閣寺が僕は大好きなのだ。

本稿で考えてきたように、〝ありのままでいること〟と〝変わること〟、〝受動〟と〝能動〟、〝運命〟と〝自己決定〟、〝世俗〟と〝超越〟などは対立するものではない。かつて金閣寺を訪れた際はまだ存在しなかった我が子と共にその確信を深めた。

荘子it（Dos Monos）

1993年生まれ。2019年に1st Album『Dos City』で米LAのDeathbomb ArcからデビューしたヒップホップクルーDos Monosを率い、楽曲のトラックとラップを担当。民族音楽やフリージャズ、哲学やサブカルチャーまで奔放なサンプリングテクニックで現代のビートミュージックへ昇華したスタイルが特徴。様々なアーティストへの楽曲提供に加え、ドラマ、映画の劇伴音楽、エッセイや映画評執筆など、越境的に活動している。

フリースタイルな僧侶たち

『フリースタイルな僧侶たち』は、宗派を超えた若いお坊さんが集まって創刊されたフリーペーパーです。2020年に10周年を迎えました。全国のお寺を中心に、書店、大学、美術館、カフェなど、さまざまな場所で配布されています。編集部は、時代ごとにメンバーを入れ替えながら活動しています。2020年からは三代目の編集部となり、学生も交えた20〜30代の、合計8名からなるチームとなりました。今では僧侶ではない人も在籍したり、中には僧侶でありながら「僧侶と名乗ることに自信がない」と悩みをこぼす人もいたり。「僧侶たち」とはいいながらも、編集部員はちょうどその間くらいの人格を彷徨いながら、誌面を編集しています。

『フリースタイルな僧侶たち』に込めているのは、このフリーペーパーを媒介に、お寺と街、そして宗教と文化の間に、ゆるやかな関係が生まれてほしいという願いです。たとえばですが、「あのお寺に、フリースタイルな僧侶たちが置いてあるらしいから、寄ってみよう」「本屋で見かけたこのフリーペーパー、面白いなぁ。今度は仏教の本も買ってみよ」、そんな声が生まれてほしいと思い、無料で誰でも手に取れるマガジンの発行を続けています。たまたまこの号を手に取った方、次号もどこかで見つけてくださいね。

サポーターを募集しています。

フリースタイルな僧侶たちは、無料のマガジンです。なので、グッズや時たまにご寄付に近い気持ちでいただける広告費以外に、収入はほとんどありません。発行ができているのは、ひとえにみなさまのご寄付のおかげです。編集部一同、さらに充実した誌面にするべく励みますので、サポーターとしてご支援いただける方は、下記の公式サイトよりお申し込みいただけると幸いです。

［サポーター年会費］

個人　5,000円　　法人　30,000円

［特典］

・『フリースタイルな僧侶たち』を発行ごとに送付
・主催イベントにおける優待
・誌面の協賛法人欄にお名前を掲載（法人のみ）

▶ サポーターのご登録はこちらから
https://freemonk.net/support/

▶ 寄付を希望される場合はこちらから
https://freemonk.net/ofuse/

一緒に何かしませんか？

フリースタイルな僧侶たちと一緒に何かを考えたり、作ったりしたい方、いつでもご連絡ください。編集部員としての加入、広告タイアップ企画、共同研究など、柔軟に受け止めます。

▶ お問い合わせは info@freemonk.net まで

Back Number

バックナンバー

Vol.58
特集『本気で地獄』
なぜ今、人はこんなに「地獄」を思っているのか。仏教の地獄から私たちが日常で感じる地獄まで、異界と現実を行き来する。

Vol.59
特集『ひとり』
ひとりだと諦めるには、ひとりとは何かを知るしかない。ひとりはどこにあるのだろうか。私たちはひとりなのだろうか。

Vol.61
特集『休む』
安らぎは、どのような「休む」の末に見つかるのか。時たまに日々の隙間で味わう、生き返るような感覚から休みを紐解く。

Vol.60
特集『BIG LOVE』
大いなる愛はどこにあるのか。現代の推し文化をヒントに、仏や墓など少し遠くにある存在と、今を生きる人の関係性を考える。

過去の号はWEBサイトからもご覧いただけます。
https://freemonk.net/magazine/

フリースタイルな僧侶たち 協賛法人サポーター

浄土宗
延命寺（堺市堺区）・吉祥寺（萩市）・慶蔵院（伊勢市）・金剛寺（京都市東山区）・西明寺（尼崎市）・西林寺（大阪府泉南郡）・正覚寺（青森市）・正善寺（伊丹市）・称名寺（京都府久世郡）・勝楽寺（町田市）・新善光寺（札幌市中央区）・青岩寺（青森県上北郡）・善願寺（甲賀市）・善道寺（札幌市豊平区）・臺鏡寺（枚方市）・檀王法林寺（京都市左京区）・潮音寺（東京都大島町）・長壽院（台東区）・念佛寺（八幡市）・梅窓院（港区）・法岸寺（静岡市清水区）・寶松院（港区）・法善寺（大阪市中央区）・妙慶院（広島市中区）・龍岸寺（京都市下京区）

浄土宗西山禅林寺派
宝泉寺（津島市）

浄土真宗本願寺派
覚円寺（福岡県築上郡）・教専寺（赤穂市）・光栄寺（井原市）・幸教寺（大阪市生野区）・光照寺（大阪市東淀川区）・西教寺（生駒市）・西方寺（大和郡山市）・西法寺（北九州市）・正源寺（大津市）・浄満寺（大阪市西成区）・信覚寺（福岡県朝倉郡）・崇興寺（福山市）・如来寺（池田市）・養法寺（金沢市）

真宗大谷派
覚法寺（福岡県八女郡）・正蓮寺（伊豆の国市）・護念寺（新潟市）・宝皇寺（函館市）

浄土真宗東本願寺派
緑泉寺（台東区）

天台宗
圓融寺（目黒区）・正明寺（姫路市）・本覺寺（横浜市鶴見区）

高野山真言宗
弘法寺（和泉市）・薬師院（岸和田市）

真言宗御室派
三津寺（大阪市中央区）

真言宗山階派
弘昌寺（大阪市中央区）

真言宗須磨寺派
須磨寺（神戸市須磨区）

臨済宗妙心寺派
宜雲寺（江東区）・勝林寺（豊島区）・陽岳寺（江東区）・龍雲寺（世田谷区）

曹洞宗
四天王寺（津市）・瑞生寺（浜松市中区）・南詢寺（守口市）・鳳仙寺（宮城県亘理郡）

日蓮宗
池上實相寺（大田区）

単立
五百羅漢寺（目黒区）・瑞聖寺（港区）・法然院（京都市左京区）

企業・団体・店舗
アンカレッジ（港区）・生田化研社（豊島区）・京美仏像（京都市北区）・薫寿堂（神戸市灘区）・神戸数珠店（京都市下京区）・作島（京都市下京区）・茶坊えにし（台東区）・寺院コム（京都市左京区）・翠光堂阪急淡路駅前店（大阪市東淀川区）・大正大学（豊島区）・学校法人鎮西学園（熊本市中央区）・豊田愛山堂（京都市東山区）・一般社団法人日本石材産業協会（千代田区）・はせがわ（文京区）・福生（堺市西区）・大阪石材工業株式会社（富田林市）

（敬称略・順不同）

サポーターの声を聞いてみました

株式会社作島
（京都府・下京区）

代表取締役 作島寛さん

伝統工芸や荘厳仏具、神具の製造・修理を行う作島は、昭和7年に創業。およそ100年となる業歴から培った職人技で、金物から木製まで、幅広く京仏具を取り扱っています。2023年7月には事務所を改装し、店舗兼ギャラリー「遊戯」を併設。日常の暮らしのなかで、仏教や祈りの心を感じるためのアイテムが並べられています。
『フリースタイルな僧侶たち』は、仏具職の関係者がたくさん出入りする事務所内に配架されていて、入荷したらすぐに無くなっているとのこと。「今の若い世代が仏教についてどう考えているのか知りたいから、みんな手にとっているんじゃないかな」と、話されていました。

フリースタイルな僧侶たち 第62号
2023年8月5日発行

発行人＝加賀俊裕
編集長＝稲田ズイキ
編集＝苫米地結子、K.NORIMASA、藤山亜弓、釋大智
デザイン＝福井裕孝、m.ito
SNS運用＝田中帆夏
Web制作＝磯部亮太

発行所　フリースタイルな僧侶たち
〒542-0085　大阪府大阪市中央区心斎橋筋2-7-12
TEL　050-5583-4330
www.freemonk.net

Mail　info@freemonk.net
Twitter　@freemonk_web
Instagram　@freemonk_official

Fine Paper